

幼児理解に基づいた保育の評価に関する考察

山 田 純 子\*

**Consideration about the evaluation of childcare  
based on understanding children**

**Junko Yamada**

**要約**

保育の反省や評価は幼児の発達理解と保育者の指導・援助の改善という両面から行うことが大切である。本稿では、幼児理解と評価の関係を踏まえ、自己の保育記録を基に日々の保育の中での幼児理解と保育者の指導の両面から考察し、保育の評価の在り方について探っていく。さらに、保育実践の反省・考察を生かした指導計画の改善についても論述する。

キーワード：幼児理解 保育者の指導・援助 保育の評価 指導計画の改善

(Abstract)

It is important to perform reflection and evaluation of childcare from both sides, understanding of child development and improvement on instructions and supports to nursery school teachers. In this report, the author considers this based on her childcare records both from understanding children in daily childcare and from instructions and supports to nursery school teachers. The author also investigates the evaluation of childcare based on the relation between understanding children and their evaluation. Furthermore, improvement to instruction plans by using reflection and consideration in childcare practice is described.

Keywords : understanding children, instructions and supports to nursery teachers, evaluation of childcare, improvement to instruction plans

---

\*受理年月日 2017 年 7 月 31 日、高松大学発達科学部准教授

## 1. はじめに

「幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくる」〔1〕とあるように幼児理解は保育の要である。保育者は、幼児の生活する姿から内面を理解し、幼児の経験していることや幼児に必要な経験を捉え援助していくのである。

もともと、子どもの内面を理解することは簡単なことではない。一人一人の幼児と真摯に向き合い、信頼関係を築きながら幼児の表情、つぶやき、行動などから内面を推し量ってみる姿勢が大切である。また、保育者の一人一人の幼児へのかかわり方が幼児の遊びへの取組みにも大いに関係してくる。

幼稚園教育要領解説(2008)には「反省や評価は幼児の発達の理解と保育者の指導の改善という両面から行うことが大切である。幼児理解に関しては、幼児の生活の実態や発達の理解が適切であったかどうかなどを重視することが大切である。指導に関しては、指導計画で設定した具体的なねらいや内容が適切であったかどうか、環境の構成が適切であったかどうか、幼児の活動に沿って必要な援助が行われたかどうかなどを重視しなければならない」〔2〕とある。

そして、2017年3月末に幼稚園教育要領が改訂され、幼児一人一人のよさや可能性を把握するなど幼児理解に基づいた評価を実施することについて要領上に明記された。このことにより、これまでの評価の考え方を引き続き維持していくということを再確認した。

そこで本稿では、上記の幼児理解と評価の関係を踏まえ、自己の保育記録を基に日々の保育の中での幼児理解と保育者の指導・援助の両面から考察し、保育の評価の在り方について探っていく。さらに、保育実践の反省・考察を生かした指導計画の改善についても論述する。

## 2. 研究の方法

- (1) 保育事例から幼児の姿について考察し発達の理解の捉えの重要な側面を導き出す。
- (2) 保育事例から保育者の姿勢や具体的な指導援助について考察する。
- (3) 幼児を取り巻く環境や保護者理解の視点から考察する。
- (4) 保育実践の反省・考察を生かした指導計画の改善を行う。

## 3. 幼児理解に基づく評価の在り方の例示

- (1) 3歳児の同年齢のかかわりの姿の捉えと援助の在り方

『わたしは、嫌なの!』(5月12日)

S子が「M子ちゃんがお顔をぎゅっとするの」とつらそうな表情で訴えてきた。「どうしてなんだろうね」と状況を理解しようと尋ねてみた。S子は「あのね、S子は嫌なのにM子ちゃんが裸足になりなうの」と保育者に一生懸命説明をする。

S子を連れてM子がいる砂場に行くとM子とT子が裸足になり声を立てて楽しそうにはしゃいでいた。保育者が「M子ちゃん、楽しそうやね」と話し掛けると、M子は嬉しそうな表情を見せた。保育者は「でも、S子ちゃんはM子ちゃんにお顔をぎゅっとされてつらいんだって」とS子の気持ちを伝えた。M子は悪びれた様子もなく「だってS子ちゃんが嫌だって言うの」と不満そうに答える。すると、S子がすかさず「わたしは嫌なの！」と大声で叫んだ。

保育者はS子とM子の互いの気持ちを伝え合いたいと考えた。「裸足は気持ちがいいからS子ちゃんも誘ったんだね。でもお顔をぎゅっとするとS子ちゃんは痛いから嫌なんだよ」とM子の気持ちを受け止めながらしてはいけないことを伝えた。そして、近くで全てを見ていたT子にもこの状況を考えさせようと思い、言葉を続けようとした時、M子が「S子ちゃん遊ぼう」と、まるで何もなかったかのようにS子を誘い、S子もまた、保育者とM子に自分の気持ちを伝えて満足したのか、誘われるまま砂場で遊び始めた。保育者は援助を途中で阻まれた状況になり、戸惑いを感じたが、これは意識や行動が前後の状況に関係なく飛んだり途切れたりする、3歳児特有の発達特性なのだろうかと思案しながら3人の遊びを見守った。

#### 『S子の挑戦』(5月17日)

S子が砂場の近くで靴下を脱いでいるところを見掛けた。そして、裸足で砂場を2、3歩歩いたかと思うと急いで靴を置いた場所に戻り慌てて靴下を履いた。先週M子に裸足になるように求められたときは強く拒否したが、やってみようかな、という気持ちをもつようになったのだと捉えた。自分が思うまま砂場遊びを楽しんでほしいと考え、その場は声を掛けずに見守ることにした。

#### 『裸足っていい気持ち』(5月25日)

3歳児健診のため、S子の祖母が少し早く迎えに来た。ちょうどその時S子は園庭のクローバを摘んで遊んでいた。その様子を見て「まあ、あの子裸足で遊んでいるわ」と驚いた様子であった。そこで、最初はとても抵抗があったようだが、友達の楽しそうな姿を見て少しずつ挑戦し始め、最近は裸足になって遊ぶことが心地よくなったようであることを伝えた。すると、S子の祖母は「あの子の父親がそうだったんです。とても潔癖なところがあって裸足になかなか出来なくてね」と語り、にこにこしながら頼もしそうに孫を見つめていた。

#### 『面白かったな。またしような』(5月26日)

保育室でS子が何か怖いものに出会ったように顔をこわばらせて靴下を履こうとしているのを見掛けた。保育者は、S子の傍に行き「S子ちゃんどうしたの」と尋ねた。S子は表情はそのままで「あのね、M子ちゃんとT子ちゃんとお水で遊んだの」と言う。遊んだというのに少しも楽しそうな表情ではないなと不思議に感じた。

どこで水遊びをしたのだろうと姿の見えないM子とT子の名前を呼びながら、水遊びができそうな場所を探して歩いていると、通り越したトイレの中から笑い声が聞こえた。戻ってトイレを見ると一つのドアの前にM子とT子の上靴と靴下が脱いであった。「このドアの中にいるのはM子ちゃんとT子ちゃんかな」と声を掛けても返事がないが、水の音が聞こえたのでドアを開けてみた。すると、なんと二人は和式便器のたまり水の中に入って遊んでいたのである。

予測もつかない光景を前にして思わず「そんなところに入ったらいけないよ」と大声を出してしまった。そして、「早く足を洗わないとばいきんマンが体の中に入って来るよ」と二人を促し、足をシャワーで洗い流した。そして、S子も急いで連れてきて足を洗った。「S子ちゃんはちょっと気持ち悪かったのかな」と問いかけると、「うん、もうしたくない」と答えた。

トイレの使い方は、個別に指導しているが、たまり水の中に入ってはいけないことは確かに注意しなかったな、と思いながらも、同時によくこんな遊び場を見つけたな、と楽しさを求めて柔軟に物や場所を捉える子どもの発想の豊かさに苦笑した。しかし、いけないことははっきりと伝えていかなければと思い、便器やたまり水について話をした。M子とT子は黙ったまま靴下を履いていたのもう十分に理解しただろうからこれ以上繰り返し言うのはよそうと思い、「楽しいこと見つけっこしようか」と他の遊びへと誘いかけた。そして、保育者が先頭になってトイレの外へ誘導していくと、そのすぐ後ろで、T子のつぶやき声が出た。「M子ちゃん、面白かったな。またしような」保育者は、（今注意したところなのに）と思ったが、「また、面白いことをしような」という意味なのだろうと捉え直し、三人が連れ立って園庭に出ていく姿を見送った。

## 【考察】

### ①発達の捉え（幼児理解の視点から）

S子は自分がやりたいことを自分のペースで進めていくことで安定するようだ。そして、好きな友達の行動に興味をもつようになり、初めてのことにも挑戦しようとしている。M子は自分が楽しいと思うことは相手もそうだと思い込んでいるのであろうか、S子が自分の提案を拒否することが納得いかず、S子の思いを受け入れられない。T子はM子の楽しい遊びの思い付きに魅力を感じ、それを拒否しようとはしない。

幼児は不快に感じることには動こうとしない。しかし、楽しさが核となって友達とかかわりをもつようになり、不快と思うことにも挑戦したりするようになると捉えられる。このことから、快・不快という自分の感情だけの枠の中で行動しようとする時期ではあるが、そこから少しずつ枠を広げようとしていることも伺える。

### ②保育者の指導・援助や環境の構成について

S子には、動き出せないのはなぜかを考えさせていく中で行動の決定基準を見つけて

いけるようにしたい。M子には友達との遊びの中で相手の気持ちに気付き、相手を楽しんでいると感じることを一緒にする喜びを味わえるようにしていきたい。T子は、自分で考えて動く楽しさを存分に経験できるようにしていきたい。

幼児が保育者の助言を受け入れようとするには保育者との信頼関係をはぐくんでいくことが大切である。保育者がしていること・いけないことをはっきり提示することは必要だが、幼児の発達や心の動きに即していかなければ真に身に付いてはいかないだろう。

幼児が自分の枠を広げようとする時期に、何に揺れを感じているのかをしっかりと捉えていかなければ適切な助言はできない。また、幼児の姿から援助の方向性を決めていく際に、該当幼児のこの時期の発達の特性として捉えて見守っていくのか、規範意識の芽生えを培っていくためには今を逃さず指導していくべきなのか、保育者自身が揺れ動くことがある。幼児と活動を共にしながらその活動及び行動が、子どもの発達にどんな意味を持つのかを考えながら指導していきたい。

### ③指導計画の改善に向けて

上記の考察から、3歳児入園当初から園内の環境(人・もの・こと)に関心をもち始め、中には積極的にかかわっていきこうとする幼児もいると捉えた。これまでは、個々の姿に視点を当てて保育を構成していたが、周囲の環境も含めて大きく捉える必要を感じる。

そこで、この時期の保育のねらいを次のように修正する。

○喜んで登園し、園の生活に少しずつ慣れる。

○自分のしたい遊びを見つけ遊ぶ。



(修正後)

○いろいろな遊びに興味をもち、保育者や気の合った友達と一緒に遊ぶ。

○身近な自然に触れ、その心地よさを味わいながらのびのびと活動する。

## (2) 自己実現をしたいという願いに即した援助の在り方

### 『Y男との出会い』4歳児4月

3歳児2学級が4歳児1学級になり新学期が始まった。Y男にとっては、担任が変わり、年長児だった兄も小学校に進学する、という園環境の変化があった。Y男は、自分の思いを保育者や友達に積極的に表現しようとしないうる子どものように見えた。保育者が話し掛けたり、遊びに誘ったりしたが、あまり反応がない。保育者は、Y男とかわりをもつためのきっかけや手がかりを求めていく一方で、Y男は新しい環境に慣れるまでに時間がかかるのだと捉え、あせらず援助していこうと考えた。

家庭訪問の際、母親からY男は自分から行動するのが苦手であるので、友達とうまく遊べるか心配であるという話を聞いた。「Y男のことをたくさん知って理解してい

きたい、信頼関係をつくっていききたいので、登降園時にY男のことを伝え合いたいです」と保育者の思いを母親に伝えた。父親とも時々送迎時に会うので、Y男が休日に遊びに出掛けて楽しかったと話してくれたことなどを伝えたりした。

このようにして、保護者とよく話をし、「何でも相談してもらえそうな関係をつくっていくことに努めた。

『僕、友達と遊んでいない』（5月7日）

ゴールデンウィーク明け、母親から相談を受けた。園での様子を尋ねたところ、Y男が「何で遊んだらいいか、分からない」「友達と遊んでない」と話すので心配であると言うのだ。

この頃には、Y男が、友達2、3名と楽しそうに積み木をしたり、絵を描いたり、砂場で山やトンネル作りをしたりするなどの姿が見られていた。保育者にもしてほしいことや困ったこと、妹の話などを言葉で伝えてくるようになっていたので、母親の話聞いて少し驚いた。それとともに、Y男の内面をよく見ていなかったことに気づき反省した。

## 【考察1】

### ①発達の捉え

Y男自身の願いを「たくさん遊びたい、いろいろなことに挑戦したい、という思いをもち、それを自己実現したい」と受け止めた。そこで、『いろいろなことに積極的に取り組み、友達とかかわりながら実現していく喜びを味わうようになる』というねらいを再設定した。

### ②保育者の願いとY男への働き掛け

- いろいろなことに挑戦していける環境を構成していく。
- Y男が自分から動き出す様子を見守ることにとどまらず、何につまずいているのかを見極め、つまずいた時に適切で具体的なアドバイスを与えていく。
- 学級の活動の中で、いろいろな子どもとかかわりがもてるようなゲーム遊びなどを取り入れていく。

### ③保護者への働き掛け

- Y男の遊びの様子や友達とのかかわりの変容などを具体的に伝えていく。園だよりや学級だよりなどで個人の姿だけではなく、集団における個々のその時期の幼児の育ちの姿を具体的に伝えていく。
- Y男が今興味をもっていることなどを情報として聞き、それをヒントにして園での活動に生かしていく。

『Y男の好きな遊び』（7月の記録から）

- 学級の中で、自分から進んで発言することはあまりないが、保育者には、自分が体験したことや作りたいものがあるときにほしい材料を求めたりしてくる。
- パズルや積み木遊びを好み、気の合う友達と一緒に作り上げることを楽しんでいる。
- 当番活動にまじめに取り組む姿が見られる。
- 虫や魚などの生き物が好きで、じっと観察する姿が見られている。また、図鑑で調べたり、知っていることを周囲の友達に伝えたりしている。興味があることにじっくり取り組み、知りたいことを追求していきたいと願っているようだ。
- カメの絵を描きたいと取り組み、時間を掛けて丁寧に色塗りをする姿が見られた。そのことを友達に認められ嬉しそうであった。
- 学級でゲーム遊びをした際に、その場で2人組、3人組になるという課題を入れていった。Y男は、自分から相手を求めて動く姿が見られた。この姿を母親に伝え、  
「自分から友達を見つけて動けるようになったのですね。」と、嬉しそうな表情でY男の変容を受け止めていた。

## 【考察2】

ポートフォリオや自己評価表などの作成に向けて保育者集団で協議を進めていく中で、記録を基に子ども理解を深めることや観点をもって子どもを見ていくことの大切さを実感した。そして、これまでのY男への援助を振り返ってみた時、Y男をもっと多面的に見ていく必要を感じた。

そこで、2学期に向けての保育者の願いと援助の方向を次のように考えた。

### ① Y男の捉えと保育者の願い

徐々に自分のしたいことが実現していく楽しさを味わうようになってきているが、時折、自信なさそうにする姿が気になる。真面目で一生懸命に取り組もうとするので、一つ一つが気になってこうしたい、こうありたいと思うが、それができないジレンマがあるようだ。その方法がわからないのかもしれない。また、自分自身のよさや長所に気付いていない、と思われる。自分の思いをのびのびと表現する喜びを味わってほしいと願う。

### ② Y男への援助

Y男と1対1の関係をもち、一緒に行動することで、先生は自分のことを何でも分かってくれるという気持ちを抱くようになることを考える。

- 自分から動き出せる環境をつくっていく。そして、やり遂げた喜びが味わえるようにする。
- Y男にスポットが当たるような話題や遊びを提供していく。

- 好きなこと得意なことに取り組む姿を学級の子どもに伝える。
- Y男の個性や資質を大切にしながら、あせらずゆったりと、そして見通しをもってかかわっていく。

### ③家庭との連携

Y男のことについてよく話し合い、Y男に対する願いを共有し、共に育てていこうとすることで信頼関係を深めていきたい。

#### 『クイズを出すよ』(9月1日)

夏休み明け、水族館で買った魚のノートを持ってきて、自分が描いた魚を嬉しそうに保育者や友達に見せていた。ノートに魚のクイズがあるので問題を出したいと言う。そこで、学級の集いの場でその時間を設けた。学級の幼児たちはY男の出す問題に真剣に取り組み、Y男とのやりとりを互いに楽しむ姿が見られた。Y男は、やってみたいと思うことを言葉に出してアピールし、自分のやり方で進めることができたという達成感を味わえたようだ。それから3日間、クイズの時間が続いた。自分から遊びを提案することがほとんどなかったK男もクイズを出す側になって積極的に参加した。

#### 『おじいさん、おばあさんとの集いに参加して』(9月15日)

「ぼく友達がたくさんおるんで」と言うY男の声が聞こえた。そこには、来園した祖母たちに嬉しそうに話をするY男の姿があった。その一言にY男の日々の生活に対する充実感が表れていると感じた。

### 【まとめ】

Y男の「友達と遊んでいない」という心の叫びに触れ、子どもが真に願っていることは何かを受け止めることの大切さを学んだ。また、家庭と連絡をとりながら、園と家庭が共に育ちを支えていこうとする姿勢をもつことが、子どもが安定感をもって生活していくことにつながっていくと考える。

学級だよりで集団における個々の生活や遊びへの取組みを伝えたことで、幼児の意識やその時期の友達とのかかわり方について保護者の理解を得ることができたようだ。

また、ポートフォリオの活用を通して、幼児理解の観点をもち、子どもを多面的に捉えていくことを継続し、保育の質を高めていくことが大切である。

### (3) 他者とのかかわりの中で自己決定していく姿の捉えとその援助の在り方

#### 『S子の母親と信頼関係を』4歳児1学期

1学期、園の送迎の際にS子の母親が、子どもに対する大人のかかわり方が難しい、ということたびたび口にしていたので、折に触れ、園での様子や保育者のかかわりを伝えるようにしてきた。しかし、母親は、保育者の話をうなずきながら聞いてはい

るのだが、何かすっきりしない表情を見せていた。やがて、これは何か別のことが気になっているようだ、ということに気付き、保育者に相談したいが、話しにくいことなので、話しやすい雰囲気やきっかけを積極的につくっていくことにした。

そうするうちに、1学期末になり、家族内で子育てを含む生活全般で意見の食い違いがあり悩んでいるということを打ち明けてくれた。保育者は、母親の話にしっかり耳を傾け、悩みを受け止めたり、自分の体験を交えて話したりするなど、受容的態度で接するように努めた。

やがて、2学期になり、S子の園生活の取組みに変容が見られるようになった。

『私がしたことやから、…』（9月11日）

お弁当を食べている時、S子がT子のお茶をひっくり返してしまった。そこで、近くにいたA子が急いで雑巾を持ってきてふこうとしたところ、S子が「私がしたことやから、私の責任です」と、きっぱり手伝いを断った。これまでは、S子は、自分のためや他の友達のために手助けをしようとする子どもの姿を横目で見ていたことが多かったので、保育者は、S子のとった行動に驚いた。そして、S子の気持ちに、変化が起きていることを感じ、「そうね、自分でしたいよね」と、自分でやってみようとするS子を応援したい、という保育者の思いを言葉で伝えた。

## 【考察1】

### ① 幼児の姿の捉えと保育者の援助

S子は、気の合う友達3、4人とヒーローごっこや手紙を書いて渡し合う遊びに熱中する姿が見られている。その遊びの中で、友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさや互いの気持ちや考えを出し合って遊びを進める難しさも体感しているようだ。

また、興味や関心に基づいて積極的に人やものにかかわっていきこうとする一方で、自分中心的な物の捉えをしがちであったり、自分の身の回りのことを他の人にしてもらおうとする態度が見られたりすることもある。

そこで、自分で考えて動こうとする兆しが見えるこの時期に、S子が自分の意志で行動し、自分でやり遂げる充実感を感じ、自信や責任感をもつことができるように援助していきたいと考える。

『2人とも、違うって』（9月12日）

K男が、S子に遊びの片付けが最後までできていないのに、席に座っていることに気付き、「S子ちゃん、早くしなよ」と注意をした。ところが、S子は、自分のポケットティッシュが袋から出てしまい、それを入れ直すのに夢中であったので、「今してる場所なの」と言い、K男の言っていることに気付かない。K男は、すかさず「違う、してない」と声を張り上げた。すると、S子は、きつとした表情で「違ってない」と言い返した。2人のやり取りを近くで見ていたM子が「2人とも違うって」と言い、S子

とK男の言葉の取り違いを伝えようとした。しかし、今度は、2人が、M子の言葉を取り違え、「違うことない」と、M子に対して激しく言い返した。そして、3人は、しだいに声を荒立てていき、大変な騒ぎになってしまった。M子は、自分が言いたいことが伝わらない悔しさを感じたのか、泣き出してしまった。

保育者は、自分の考えをはっきりと伝えたいという必要感をもつようになる経験につながると考え、何とか自分たちで行き違いに気付いてほしいと、はらはらしながら見守っていたのだが、M子に助け舟を出すことにした。「M子ちゃんは、何が違うと思うのかを言ってみて」とM子の手を握り、励ました。M子は、「K男くんは、S子ちゃんがままごと遊びの片付けができてないことを言っている。でもな、S子ちゃんはティッシュを入れることを言っているから違うんや」と涙を拭きながら言った。S子とK男は、M子の言葉で、互いの勘違いに気付いたようで、ずっと表情が和らいできた。「M子ちゃん、2人が分かってくれてよかったね」と話し掛けると、M子は、ほっとしたようにほほえんだ。

降園時に、この出来事を母親に話しながら、S子が自分のことは自分ですという強い決意を『責任』という言葉で表したことに心の成長を感じたということや今が成長の1つの節目だと思うので、その気持ちに寄り添ってそっと後押ししてあげたいという保育者の思いを伝えた。そして、S子や学級の子どもたちが、今どんな経験をしているのか、どんな育ちが見えるのかを話した。母親は、にこやかな表情で話を聞いていたが、やがて、「先生、私この頃だんだん強くなってきているんですよ。家族に少しずつ、自分の思ったことを口に出してみようって思うのです」とにこにこしながら自分の決意を伝えてくれた。

## 【考察2】

### ①発達の捉えと保育者の援助

自分が遊んだものは自分で片付ける、友達と一緒に使ったものも協力して後片付けをする、という約束事が子どもたちの中で浸透してきている。そんな中で、K男は、すかさずS子の態度を批判しようとしたのである。これは、2人が互いを知ろうとする気持ちがなかったために起きたいざこざであると捉えられる。M子が2人の主張を受け止め、間に入って、どうにかしようとしてみたことを保育者が支え、応援したことが、3人が互いの思いに気付くきっかけにつながっていったようだ。保育者がいつ、どんなタイミングでどのように具体的な援助にかかわっていくかが大切であると改めて感じた。

### ②S子を取り巻く環境から考察する

S子は、興味や関心に基づいて積極的に人やものにかかわっていかうとする一方で、自分中心的なものの捉えをする。また、自分の身の回りのことを大人にしてもらおうとする態度が見られることなどから援助の必要を感じていた。生活への取組み方は、

家庭ともよく連携していかなければいけないことなので、保護者と話し合う機会をもつようにした。母親にS子の姿を伝えたり、家庭での様子を聞いたりしながら、S子の生活への取組み方が前向きになってきたことを共に確認し、その成長を喜び合った。1学期に見られていた母親の不安な表情が和らいできたように思われる。

ところが、母親と話すうちに、大人が手出し口出しすることが多い中で育ってきたことの他に、家庭での母親の存在が弱いことが分かってきた。そして、母親にも支援が必要であると感じ、保育者と母親が互いに打ち解けて気軽に話し合える関係になるように努めてきた。このようにして、母親に支援していったことも、子どもの変容につながっていったのではないかと考える。

#### 4. 成果と課題

##### (1) 成果

- 保育の中で、いつ、どこで、どんなタイミングで助言をするべきか迷うことがある。保育者の役割について考えたとき、やはり、保育のその拠り所となるのは、日々、幼児と共に生活し、幼児と向き合い、発達の過程を見てきたことによるものである。このことは、本稿で取り上げた事例の検証で明らかになったと捉える。
- 基本的な生活習慣の形成を図り、幼児の生活が実り多いものになるためには、特に、家庭との連携が必要であることも明らかになった。園と家庭が互いの考えを伝え合い、話し合う機会を積極的に設けていく中で、子育てを共有していこうという保育者の思いが伝わり、そのため、保護者からも信頼を得られたように思う。そして、この積み重ねが幼稚園教育や幼児教育に対する理解が得られることにつながっていくと考える。
- 保護者への情報発信の際、気をつけたいことはわかりやすく幼児の具体的な姿を伝えることである。そのためには、日々の保育の記録や幼児の育ちの記録が必要である。また、発信時に、よりわかりやすい媒体を活用することも大切である。学級だよりで集団における個々の生活や遊びへの取組みを伝えたことで、幼児の意識やその時期の友達とのかかわり方について保護者の理解を得ることができたようだ。
- 指導計画の作成では、一人一人の発達の実情を捉え、それに沿って幼稚園生活を見通すことが基本となる。そして、一人一人の幼児の発達の実情を捉えるためには、幼児の発達をどのように理解するかが要となるといえる。
- 幼稚園における指導は、幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、幼児の活動に沿った必要な援助、反省や評価に基づいた新たな指導計画の作成といった循環の中で行われるものである。指導計画は、このような循環の中に位置し、常に指導の過程について実践を通して反省や評価を行い、改善が図られなければならない。また、保育における反省や評価は、このような指導の過程の全体に対して行われるものである。この場合の反省や評価は幼児の発達の理解と保育者の指導の改善という両面から行うことが大切であることが確認できた。幼児理解に関しては、幼児の生活の実態や発達の理解が適切であったかどうかなどを重視することが大切である。

指導に関しては、指導計画で設定した具体的なねらいや内容が適切であったかどうか、環境の構成が適切であったかどうか、幼児の活動に沿って必要な援助が行われたかどうかなどを重視しなければならない。さらに、これらの反省や評価を生かして指導計画を改善していくことは、幼児期の充実した生活をつくり出す上で大変重要であるといえる。

## (2) 課題

- 一方、課題も明らかになった。保護者への説明の際、子どもの育ちを言葉で伝えることには限界がある。誰にでも理解できる説明とその根拠の明確化が必要である。勿論、このことは、指導の評価の際にも大切な要件である。つまり、情報の可視化を工夫することが必要であると考えられる。

## 5. 今後に向けて

近年、幼児教育が重要視されているが、保育者の役割や就学前教育施設の教育的役割などについては、地域社会には十分な理解が得られていない。そのため、幼児の発達や学びの姿はもちろん教育内容や方法について可視化し、発信する必要を強く感じる。そのためにも日々の記録ノートやドキュメンテーション（実践を写真、動画などに記録）、ポートフォリオなどにより保育の評価の参考となる情報を日頃から蓄積することが重要となってくる。

今後は、可視化という視点で保育の評価について研究に取り組んでいきたい。

## 引用文献

- [1] 文部科学省(2010)『幼児理解と評価(幼稚園教育指導資料第3集)』ぎょうせい
- [2] 文部科学省(2008)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
- [3] 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領』フレーベル館

## 参考文献

- ・文部科学省(2015)『教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料(2)』
- ・文部科学省(2013)『指導計画の作成と保育の展開(幼稚園教育指導資料第1集)』ぎょうせい
- ・ベネッセ次世代育成研究所(2013)『第1回幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書 [2012年]』ベネッセコーポレーション
- ・佐伯 胖(2001)『幼児教育へのいざないー円熟した保育者になるためにー』東京大学出版会
- ・文部科学省教育課程課・幼児教育課編(2000)『初等教育資料7月号』東洋館出版社
- ・津守 真(1987)『子どもの世界をどうみるかー行為とその意味ー』日本放送出版協会